

## 君は高等教育の意味をどう考えるか

片岡徳雄 教育工学部 教授

教育学部長 片岡徳雄

太平洋戦争中、ハワイで捕虜収容所の責任者として働き、今は日本で大学の教授をしているアメリカ人が、「こんなことを語っていた。」

「当時の日本人で、ファシズム体制をより信じていたのは、なんといっても、義務教育しか受けていない人々だった」

「戦争を知らない」君には想像もできないことだろうが、あの頃、ほとんどの日本人は一つのイデオロギー教育で染め上げられていた。ところが、一外国人の目からではあるが、そのようなファシズム教育の中でも中等・高等教育を受けた人たちは、まだしも、枠の外に出て考える術（すべ）を身につけていた、と見られていたわけである。

私にも若干の実感がある。終戦のラジオ放送を聞いたあと、校庭で上級生たちが論議するのを、聞くともなしに聞いていた。日本はこれからどうなるか。日本人はどう生きてゆくか。真剣に論じていた彼らの一人が、とつぜん、叫ぶように言った。

「左翼が動くぞ、きっと！」  
（左翼とはなに？ 動くとはなに？）  
天皇制しか教えられず、それしか知らなかった十五歳の私は、これからの日本の運命を左右する

らしい「何物」かについて断言したこの上級生を、まるで異邦人に接したような眼差しで見たことであつた。

それから約四十年たった今――

日本の高等教育進学率は約35%に及び、新聞普及率はアメリカ、イギリスを抜いて世界第1位、テレビ普及率はアメリカについて第2位、出版率は第3位である。もはや日本は世界各国の中でも有数の、高学歴化社会であり、情報化社会である。

君もまた、高学歴取得者の一人として、情報と知識の洪水の中に入ろうとしつつある。いや既に、ドブプリと身をひたし続けてきた、と言うべきかもしれない。

しかし、これだけは忘れないでほしい。君が今まで学んできたことや、先人たちがよとしてきたこと以外に、もっとよい方法や考え方はないものか。とくに「人間を教育するとは何か」「学校とは何か」大小いろいろ考え直してみる。そういう「疑い」から発した「はみだし」と「自由」の学習こそこれからの生活の真髄であることを、入学の喜びのさ中であつて、どうか忘れないでいてほしい。